

表紙・口絵

『早稲田大学図書館紀要』表紙

『紀要』の表紙は、これまで大きく四たび、その趣をかえてきた。創刊から20号（一九七九年刊）までは、図書館の外観や特徴的な内装の写真が表紙を飾った。毎回異なるこの写真、創刊当初は、大野實雄館長が自ら撮影したものが表紙、裏表紙に用いられ、その後は鈴木正一氏、小野隆雄氏ら、何名かの図書館員の名が撮影者として記録されている。

表紙の様子が大きく変わるのは22・23合併号（一九八三年）からである。ここから34号（一九九一年）までは、当時の図書館（現・二号館）の正面入り口のデザインが表紙に採用されている。実は、21号と22・23号の間には三年の空白期があり、いわば「復刊」にあたり、あらたなイメージが採用されたものである。

次の変化は、35号（一九九二年）。ここから47号（二〇〇〇年）までは現在の中央図書館入り口の写真が用いられた。これは前年（一九九一年）四月の新中央図書館開館をうけ、変更されたものである。

今日のような館蔵資料を用いた表紙となるのは48号（二〇〇一年）からである。新館開館から一〇年、新世紀の到来とともに『紀要』もその装いを新たにすることになる。

